



ヴォルフガング・レーナート博士による講演 「知られざるヴァイセンホーフジードルングとブルーノ・タウト」

お茶の水女子大学名誉教授 田中 辰明

はじめに

熱海ブルーノ・タウト連盟(矢崎英夫代表)主催により2022年8月2日(火)、熱海市起雲閣(写真1)音楽サロンにおいて、タウト設計の旧日向家熱海別邸(写真2)の再公開を記念した講演会が「地球人ブルーノ・タウト」というテーマのもと開催された。

会場には東京から建築家西野雄一郎氏を初め多数の聴講者が参加し、コロナ第7波のなかとしては大変な盛会であった。



写真1 熱海市起雲閣金剛の間

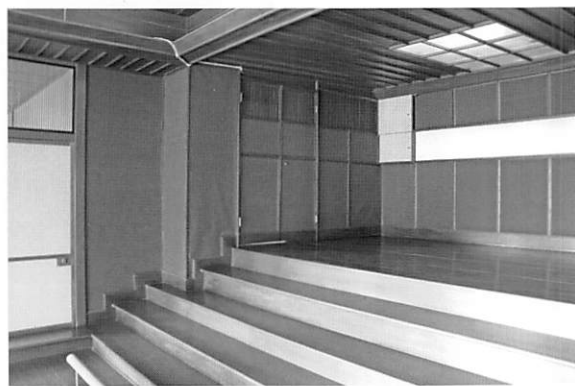


写真2 日向別邸洋室

第一部はタウト研究者西川新八郎氏(写真3)による「地球人タウト」という講演があった。氏の著書「ライト&タウトたをやかに・建築家が視る日本文化の輪郭」(中央公論事業出版)の内容解説を中心にブルーノ・タウトの思索を探るという内容であった。第2部はドイツのエスリンゲン市の建築家ヴォルフガング・レーナート博士(写真4)による「知られざるヴァイセンホーフジードルングとブルーノ・タウト」という講演であった。当初はレーナート博士を会場にお招きし



写真3 第一部講演を行った西川新八郎さん



写真4 第2部講演を行ったヴォルフガング・レーナート博士

講演して頂く考えもあったが、コロナ禍が収まらないうえ、ウクライナで戦闘が勃発したことにより、招待を断念した。代わってパワーポイントを作って頂き、その解説をして頂くことにした。その説明を筆者田中辰明が和訳し、当日発表するという手法をとった。コロナ時代のやむを得ない方法である。

1. ヴォルフガング・レーナート博士の講演

1-1. ブルーノ・タウト

ブルーノ・タウトは1880年5月4日に東プロシヤのケーニクスベルグ(Königsberg)で生れた。プロスタントの騎士団が開発した土地で哲学者のカントをはじめ有名人を多数輩出した土地である。第二次大戦後ロシア領となり、現在はカリニングラードと呼ばれている。タウトはケーニクスベルグで建築の専門学校で学んだ後、実務についた。ハンブルグ、ヴィースバーデンの建築設計事

務所で見習いをしたのち、ベルリンでもBruno Möhringの事務所で働いた(1903-1904)。さらに1904-1906の間Stuttgartのテオドール・フィッシャーの事務所で働いた。フィッシャー(写真5)はミュンヘンの都市計画を行い、Stuttgart大学で建築学の教授をしていた。氏の建築設計事務所では後にドイツの有名建築家となる優秀な若手建築家が働



写真5 テオドール・フィッシャー (Theodor Fischer)

いていた。氏の事務所に入る予定の仕事、イエーナ大学設計をタウトに任せる予定であったが、契約が遅れ、その間タウトはStuttgartのヘンゲラーとカツエという設計事務所で働き給与を得ていた。その後1904~1908年の間フィッシャーの下でイエーナ大学の設計を行った。またStuttgartのホイシユタインシュレー(高等学校)の設計を行い、彩色を行った。またロイトルンゲン近郊のギメンタードルフで労働者の為の集合住宅団地の設計を行っている。この団地は正方形の形成と広いスイングカーブを持つ道がある空間構成を持っている。(写真6)これはタウトがマルチン・ヴァーグナーと共に1925~1930年の間に建設したベルリンのブリッツにある馬蹄



写真6 ロイトルンゲン郊外のギメンタードルフの労働者住宅団地



写真7 ベルリン市ブリッツの馬蹄形住宅



写真8 ウンターレキシングンの教会

形住宅(写真7)(2008年ユネスコ世界文化遺産登録)のヒントになっている。

テオドール・フィッシャーは1901年から1908年迄Stuttgart大学の教授をし、建築界に多大な影響を与えた。1908年氏はミュンヘン工科大学に戻った。1917年には「ドイツ建築の為の宣言」を出版し、その中で建築教育の在り方を提案した。氏の考え方は2年間の予備教育の後3年間の建築プロパーの教育を行うべきとし、これはグロピウスのバウハウス宣言にも影響を与えた。テオドール・フィッシャーが受けたStuttgart郊外のウンターレキシングンの教会(写真8)改修工事をブルーノ・タウトが担当し、これがタウトの独立を促した。

シュットガルトの郊外ウンターレキシングン村の教会修復工事設計の仕事はブルーノ・タウトにとり、最初の仕事であった。タウトの計画ではパイプオルガンは協会内の西側に配置換えされ、祭壇、洗礼台、礼拝者の長椅子、貴族席、などが再配置された。教会内のコンセプトは現在も無事に保存されている。タウトは色彩に凝り、4つの異なる配色を行った。礼拝用長椅子は苔のような緑色、天井は赤、内壁は青みがかった白、すなわち水色であった。聖歌隊が立つ場所、すなわち祭壇の上は青金色であった。タウトは自分の考えを絵にして牧師に示し、自分の案に賛成を得る努力をした(写真9)。当時の教会の評議員会はこの配色に難色を示し、後に配色の変更が行われた。教会内の絵画は画家フランツ・ムッツェンベッ



写真9 タウトは自分の案を絵にして牧師の理解を得た。



写真10 タウトが改修設計を行ったニーデンの教会内部、ムツェンベッヒャーが教会内部の絵画を作成

ヒャー(Franz Mutzenbecher)により描かれた。ブルーノ・タウトはその後も彼と仕事を共同で行った。1911年にタウトがニーデンの教会で改修工事を行った際にムツェンベッヒャーが教会内部の絵画を担当した(写真10)、1914年にドイツヴェルクブンドがケルンで展示会を行った際にタウトは「ガラスの家」を展示し、その内部の絵画をムツェンベッヒャーが担当した。

1-2. ドイツヴェルクブンド

ブルーノ・タウトがシュットガルトのテオドル・フィッシャーの設計事務所に勤務していた1907年にドイツヴェルクブンドはミュンヘンで設立された。創立者は建築家ヘルマン・ムテジウスを中心に政治家フリードリッヒ・ノイマン、建築家ヘンリー・ファン・デ・ヴェ

ルデ、ペーター・ペーレンスらであった。ドイツヴェルクブンドは優秀な芸術家、建築家、職人(手工業者)、実業家、商人、文筆家が集まった協会であった。テオドル・フィッシャーは創立者の重要な位置を占める一人であった。建築家ブルーノ・タウトは後にバウハウス初代校長になるヴァルター・グロピウスと共に1910年にドイツヴェルクブンドに入会している。ドイツヴェルクブンドはムテジウスが英国で学んだウィリアム・モリス、ジョン・ラスキンの芸術と工芸運動の理想の流れに沿っている。ヴェルクブンドの新しい考え方は工業生産、大量生産もこの理想の為に使用すべきであるという事であった。詩人ヘルマン・ヘッセは1912年にヴェルクブンドに対し、「芸術家は手工業者と製造業者と協力し、質の高い仕事がないならないようにと提言しています。それは、例えば地質学のラスキンの考え方ですが、より現代的で、より実用的で決して狭い考えではありません。それは芸術性の高い高品質の製品を製造すべきですが、経済的にも利益を出せるという条件が大切であるとしています。」と書いている。産業革命が先に起こった英国製品は質が良かった。英国製を真似して作られたドイツ製品は品質が劣っていた。従って英国からドイツ製品には“Made in Germany”と書くように要求されていた。ドイツ・ヴェルクブンドの品質向上運動の努力により、現在では“Made in Germany”は高品質の代名詞にまでなっている。

ヴェルクブンドの目的は「芸術、産業、工芸の相互協力における商業製品の洗練と品質」に対する要求であった。品質の面ではヴェルクブンドのメンバーの中で非常に異なる考え方があった。ペーター・ペーレンスはAEG社の発注により、建築(写真11)からティーポット(写真12)、ランプ、扇風機(写真13)などの製品まで、デザインを品質と考えていた。ペーレンスは「工業デザイン」を考えていたのである。AEG社にはペーター・ペーレンスを全面的に信頼し、ヴェルクブンドの運動に理解を示したエミール・ラテナウ、ヴァルター・ラテナウ父子のAEG社長がいた。子息のヴァルター・ラテナウは外務大臣も務め第一次世界大戦敗北後のドイツの立て直しに努力し、ドイツの「知」と呼ばれたが、1922年に公邸を出て外務省に向かう路上で右翼により暗殺された。ペーター・ペーレンスは工業デザインを押し進めたが、一方テオドル・フィッシャーは全く異なる考え方をしていた。フィッシャーは職人技を好み要素にロマンを求めたのである。ちなみにAEGタービン工場はその後修復工事も行われ、現在も立派に稼働している(写真14)。



写真 11 ペーター・ペーレンス設計の AEG タービン工場



写真 14 現在の AEG タービン工場(現在はジーマス社)

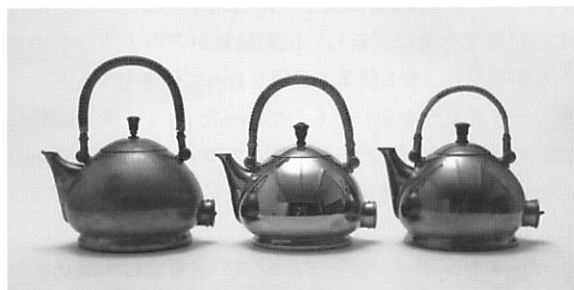


写真 12 ペーター・ペーレンス設計の AEG ティーポット

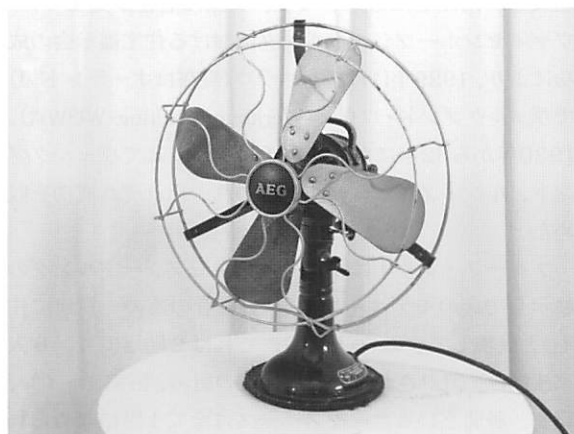


写真 13 ペーター・ペーレンス設計の AEG 扇風機

1914年ケルンで開かれたヴェルクブンドの展覧会では立場の違いが明確に表れ、議論された。建築に対する考え方も類型化、標準化を大切にする考え方と、建築家個人の自由な発想を大切にする考え方で、議論があった。それらの考え方の相違は出品された建築にはっきりと表れた。ヴァルター・グロピウスのモダンな工場、ブルーノ・タウトのやはりモダンな「ガラスの家」(写真15)があり、一方でテオドール・フィッシャーの展示会場メインホール(写真16)は古典主義の建築であった。ブルーノ・



写真 15 ブルーノ・タウトのケルンのヴェルクブンド展覧会への出品作品「ガラスの家」

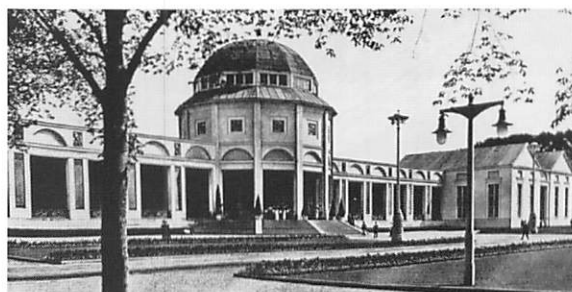


写真 16 テオドール・フィッシャーのケルンヴェルクブンド展覧会への出品作品「メインホール」

タウトとタウトの師匠テオドール・フィッシャーはこの展覧会で非常に対照的な立場を表したのである。

第一次世界大戦の終戦間際にヴェルクブンドの第一世代のメンバーは引退をした。1919年4月にヴァイマルの地でバウハウスがヴァルター・グロピウスを校長と

して発足する(写真17)。1920年代、ヴェルクブンドはバウハウスの影響を強く受ける。第一次世界大戦の結果、ドイツではハイパーインフレも起こり、政治的、経済的な危機が生じた。第一次世界大戦前から都市部では住宅不足が問題化していた。大戦中、戦後も住宅は建設されなかったため、住宅不足の状況は更に悪化した。当時の集合住宅の衛生状態も劣悪で、多くの流行病が発生した。当時の大都市における住宅の欠乏に関し、ベルリンの労働者の生活を沢山スケッチした画家であり、イラストレーターであったハインリッヒ・チレ(写真18)はそのスケッチを残している。1918年のスペイン風邪のパンデミックで状況はさらに悪化した。不衛生な住宅の状況を改善するために新しい住宅団地(ジードルング)建設の為に住宅プログラムが誕生した。これらの出来事はヴェルクブンドの理論に影響を与えた。芸術(アート)とクラフツマンシップが焦点となった。新しい目標は住宅の改善であり、新しい経験、新しい方法そして合理的な建設方法が求められた。日当たり、通風、植栽といった衛生的で審美的な品質確保が求められるようになった。

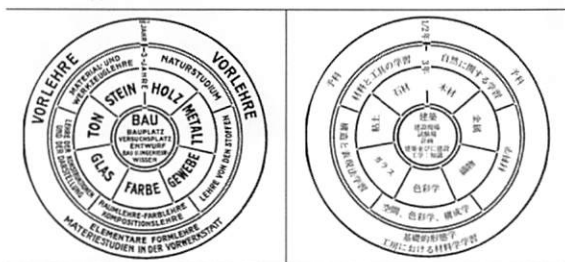


写真17 バウハウス発足時の教育プログラム



写真18 ハインリッヒ・チレが残したスケッチ「家族がひしめき合って住む」

1-3. ヴァイセンホーフジードルング

1927年に第一次世界大戦で、品質の低下したドイツの住宅建設技術を一気に向上させることを目的として、最初のヴェルクブンド住宅展示会がシュツットガルトで開かれた。シュツットガルト市はこの目的のためにヴァイセンホーフ地区に土地を提供している。建設が始まり、3ヶ月以内に63の集合住宅、独立住宅が建設された。欧州諸国から有名建築家17名が招待された。その建築家は初期モダニズムの重要な建築家であった。バウハウス3代目校長になるミース・ファン・デル・ローエが全体を統括した。フィリップ・ジョンソンはミース・ファン・デル・ローエの75歳に誕生日に「1927年にミースが招待する建築家を選び、新しい国際建築がどのようなものであるかを示し、有名建築家が隣り合って仕事をするという驚くべき先見性を示したものであった」とミースを絶賛した。ヴァイセンホーフジードルング(Weissenhofsiedlung)の敷地配置図を写真19に示す。この写真で薄い文字で示された住宅は第二次世界大戦で破壊され、現存していない。

ヴァイセンホーフジードルングの展示会は大成功をおさめ、展示の期間も延長された。展示会終了後、実際に建設された住宅は借家となり、実際に居住が始まった。ヴァイセンホーフジードルングにおける住宅展示会の成功により、1929年にはプレスラウ(現在はポーランド領)でヴェルクブンド・ヴヴァ(Werkbundsiedlung WUWA)、1930年から32年にかけてはチューリッヒでヴェルクブンド、ルン・ノイビュールが行われ、それぞれ成功を取めた。

ブルーノ・タウトはヴァイセンホーフジードルングの展示会で氏のモデルハウスを「労働者の為の一戸建て住宅」と表現していた(写真20)。これは2階建てで、6人家族向けに設計されていた。住宅の厨房、浴室、トイレ、寝室、居間といった機能スペースは全て1階に収められていた(写真21、22)。その上の2階には追加の部屋として女中部屋、客用寝室と屋上テラスがあった。ブルーノ・タウトの住宅は1944年末に第二次世界大戦の空爆を受け大きな損傷を受けた。それを簡単な方法で修理したが、修理方法が十分でなく、1958年に取り壊されてしまいその後も復旧されていない。

ブルーノ・タウトは当時から断熱による省エネルギーの重要性を考えていた。「ターモスバウ」と呼ぶ魔法瓶建築をここで実施している。実弟のマックス・タウトもここでカラフルなパネルで被覆された魔法瓶建築を建設したが、第二次世界大戦の空爆で破壊された。またハンス・

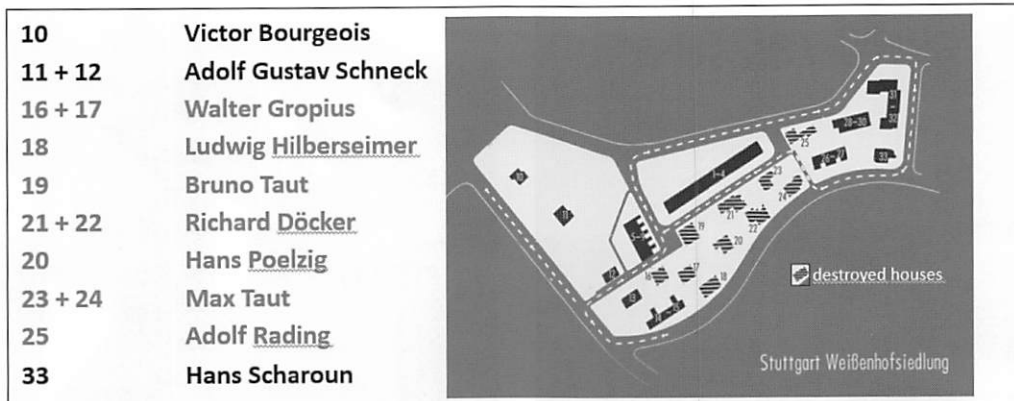


写真19 ヴァイセンホーフジードルングの敷地配置図



写真20 ブルーノ・タウト設計の住宅

シャロンは断熱材となる軽石パネルを備えた魔法瓶住宅を建設した。

住宅団地 ヴァイセンホーフジードルング (Weissenhofsiedlung) の名前の由来を説明する。ヴァイス (Weiß) はドイツ語で「白い」という意味である。実際この住宅団地では白色の住宅が沢山建っている。「白い住宅を建設する住宅団地」とも解釈されがちであるが、これは間違いである。この住宅団地の名は18世紀にパン屋と穀物商を営み「ヴァイセンホーフ」と呼ぶ邸宅を所有していたゲオルグ・フィリップ・ヴァイス (1741-1822) の名によるものである。ヴァイセンホーフジードルングの殆どの住宅の外装は白色である。コルビジェ設計の住宅も白色であるが、1階の柱に青を使用し、1階の後方の壁は赤味のかかった茶色が使用されている (写真23)。

一方ベルリンでカラヤンが指揮をしたベルリンフィルハーモニーの建物設計を行ったハンス・シャロンは突き出した庇の裏側にオレンジ色で彩色し、これをアクセントとしている (写真24)。

ル・コルビジェの住宅 (写真25) は現在ヴァイセンホーフジードルングの展示会場になっており、内覧が可能である。学芸員が丁寧に案内をして下さる。



写真21 ブルーノ・タウト設計の住宅平面図

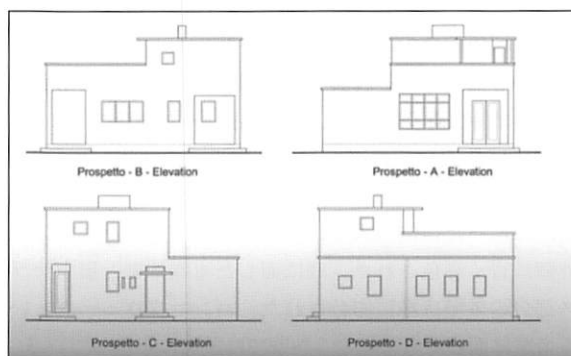


写真22 ブルーノ・タウト設計の住宅立面図

外壁に彩色された住宅もあることにはあった。オランダの建築家ヤコブス・ヨハネス・ピーター・アウトはヴァイセンホーフジードルングの集合住宅で水色の彩色を外壁に施し、ピーター・ペーレンスはテラスハウスを



写真23 ヴァイセンホーフジードルングに建つル・コルビジェの住宅



写真24 ヴァイセンホーフジードルングに建つハンス・シャロンの住宅



写真25 ル・コルビジェの住宅の内部

ベージュ色に仕上げている。白色の住宅はすべての面の外壁が白色で仕上げられ、このような住宅が殆どであったが、例外的なペーターペーレンスの住宅では外壁のすべての面が彩色されていた。

1-4. ブルーノ・タウトの住宅

ブルーノ・タウトの住宅はハウス19と呼ばれた。ここで最も印象的なのはカラフルな外装であった。タウトは外壁の各面でそれぞれ異なる色彩を使用した。使用された色彩は赤、青、緑、そして黄色といった原色であった。内装には最低6色のベーシックカラーを採用している。北側の外壁は赤であった。ブルックマンヴェークという道路に沿った西側の入り口と2階の南側とテラス部分の外壁は青く彩色された。庭に面した東側外壁と屋上テラス部分の外壁は緑に彩色された。パンコウヴェークという道路に面した南に面する外壁では黄色に彩色している。1927年にブルーノ・タウトは「一住宅(Ein Wohnhaus)」という著書を出版している。ここでタウトは「色彩に対する感覚として、「ほとんどの人は、色彩を専門としている人を例外として、色彩に対し共感、反感を持っており、彩色に対する評価は個人の好み、センスに基づかないわけにいかない」と記している。

おわりに

ヴァイセンホーフジードルングのル・コルビジェハウスはヴァイセンホーフジードルングの展示会場になっている。ル・コルビジェ・ハウスの内装は中間色が使用されている。ブルーノ・タウトの住宅は赤、青、緑、黄色といった原色が使用されていた。大方の日本の方はル・コルビジェの彩色に軍配をあげるであろう。ル・コルビジェはフランスの太陽がさんさんと照る土地で活躍した建築家である。一方ブルーノ・タウトはベルリンを中心としたドイツの北部で活躍した建築家である。ベルリンは北緯52.52度にあり、昔の樺太の白露の国境線に相当する。9月ともなると重い雲が垂れ込み「一体何時になるとこの雲はどいてくれるのか？」という雰囲気になる。冬の日照時間も極めて少なく、午後3時には太陽は姿を消してしまう。日の出も遅い。どうしても人々の心は陰鬱になりがちである。このような雰囲気では生きてゆく勇気を与えるのは建物の原色の塗装なのである。

参考文献

1. 田中辰明：W. レーナート博士講演「木質系断熱材と木造建築の発展」月刊建築仕上技術2017年2月号
2. 田中辰明：ドイツのエコ建築家ヴォルフガング・レーナート博士の講演月刊建築仕上技術2019年12月号
3. 西川新八郎：ライト&タウトたをやかに・建築家が視る日本文化の輪郭。中央公論事業出版
4. 田中辰明：ブルーノ・タウト、日本美を再発見した建築家、中公新書2169
5. 田中辰明：ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会、東海大学出版会